

斗南藩

ゆかりの地を巡る

むつ市

斗南藩史略年譜

年代	西暦	事	跡
明治			
元	1868	会津藩主松平容保、若松城開城降伏。	
2	1869	松平容保の長男・容大誕生。 新政府、当時生後5ヶ月の容大に特旨を以て家名を再興させ、3万石を下賜。	
3	1870	藩名を「斗南」と決定。 旧会津藩士とその家族、新天地斗南へ移住。 田名部郊外妙見平を斗南ヶ丘と改め、新市街地の建設を図る。	
4	1871	容大公、田名部に到着。 廃藩置県が行われ、斗南県と改称。 容保公、田名部に到着。 容保・容大の両公が東京へ帰還。 斗南、七戸、八戸、黒石、館の五県を弘前県に合県。	

姉妹都市 福島県会津若松市



戊辰戦争の敗北によって、この地に移封された会津藩士とその家族達。その子孫が多いことから、かつての城下町として名高い会津若松市との新たな交流が持たれています。

写真提供・会津若松市

昭和59年9月23日締結



〒035-8686
青森県むつ市中央一丁目8番1号
むつ市経済部商工観光課
TEL 0175-22-1111 (代表)

発行/平成27年5月



斗南藩縁起



かた もり
会津藩主 **松平容保**

尾張徳川家の分家にあたる高須藩3万石の松平義建の六男として生まれる。8代藩主松平容敬に嫡男がいなかったため、12歳のとき養嗣子として迎えられ、18歳の若さで9代目当主となる。



かた はる
会津藩主 **松平容大**

9代当主容保の長子で、幼名は慶三郎。明治2年(1869)に家名再興が許されたため、生後わずか5ヵ月で松平家11代を継ぎ、陸奥国斗南藩主となり、のちに元服し、名を容大と改めた。



斗南藩権大参事 **山川 浩**

若い頃から「会津の知謀」として名高く、幼主松平容大を戴いて新生斗南藩の執行職として全責任を担った。数々の困難に対し、皆の先頭に立って活躍した。



陸軍大将 **柴 五郎**

会津藩上級藩士の五男として生まれ、明治3年12歳のときに斗南藩へ移封される。後に上京し、義和団事件などで活躍。大正8年に陸軍大将となる。 写真提供：会津武家屋敷

表高 23 万石を誇り、独自の伝統文化を華咲かせていた会津藩。尾張・紀伊・水戸の徳川御三家に次ぐ家柄で、葵の紋を許された奥羽の雄藩でした。黒船来航の前年にあたる嘉永5年(1852)、会津では藩主が代わり松平容保(かたもり)公が9代藩主を継ぎます。ペリー来航を契機に佐幕派と倒幕派が対立する中、文久2年(1862)、容保公は幕府の命を拝し、京都守護職に就任。会津藩士たちを率いて攘夷運動が激化し無法地帯と化した京都で治安維持に努め、天皇はもとより一般庶民からも厚い信頼を受けていました。公武合体の第一線に立って職務をまっとうしたものの、慶応3年(1867)大政奉還、王政復古の大号令が発せられ、5年にわたる京都守護職を解任されます。しかし薩長両藩を主軸とした新政府は、自らの威令を浸透させるためにも、旧幕府を戴く会津藩を潰滅させようと画策します。こうして、会津藩と新政府との戦いの火ぶたが切って落とされました。

この戊辰戦争に敗れた会津藩は、天皇および幕府に対する厚い忠誠の念にもかかわらず、「朝敵・逆賊」の汚名を着せられ廃藩となりました。崩壊を余儀なくされた松平家ではありましたが、幸か不幸か明治2年(1869)にわずか1年1ヵ月余りで家名再興を許されます。そこで、容保公の実子で当時生後5ヵ月の容大(かたはる)公が後を継ぎ、斗南藩3万石を立藩。しかし、容大公は幼令であったため、山川浩が権大参事となり新藩の全責任を負い、新領地を治めることになりました。23万石からわずか3万石に削封された会津人たちは、こうして北奥の斗南藩領へと移住することになったのです。

斗南藩。その苦難の軌跡をたどる。

斗南への移住経路



北の地への移住

これは会津人たちの新たな血と涙と苦汁の日々のはじまりでした。

明治三年（一八七〇）春。淡い希望と深い悲壮感を胸に、移住がはじまりました。海路をとった第一陣三〇〇人は、品川を出港。以後続々と蒸気船で北上がはじまり、大平や野辺地、八戸などに入港、そこから入植地の村々へと移っていきまします。一方陸路で移転した者たちは、悲惨な旅路であったと言います。宿泊に難色を示す旅籠も多く、また晩秋のことで、みぞれまじりの寒さに死者も多数にのぼり、自殺行為に等しいものでした。

入植先での生活もまた、目を覆うほどきびしいものだったようです。一人一日三合の扶持米は保証されていましたが、国産米に南京米を混ぜた粗悪なものでした。でんぶんを作ったり、海藻の根を加工したり、松の木の白皮を食べべたり農家の残飯を漁ったりしたと言いますから、飢餓地獄そのものだったようです。冬に入ると餓死や凍死、栄養失調などで死者が続出しました。

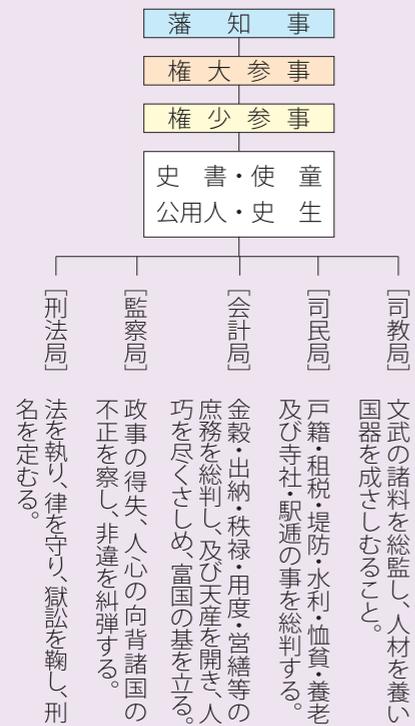


新時代を見据えた施政

およそ、二八〇〇戸、一七三〇〇人余りが移住していましたが、藩がまず手がけたのは山川浩を参事にすえ、五つの局を組織しての機構整備でした。また、旧藩時代の家禄や身分制を廃止、特筆すべきは、全国に先駆けての廃刀令や戸籍の作成など、新しい時代をにらんだ施政を行っていました。また、子弟教育も怠らず、藩庁が置かれた円通寺に斗南藩校日新館を開校したほか、領内各地に分校にあたる郷学校を開設しています。さらに、安渡と大平を合併した大湊を東北の長崎と位置づけ、将来日本の開港場とする



斗南藩庁組織図



新たな街づくり

街づくりにも着手し、田名部郊外の妙見平と呼ばれる丘陵地帯を開墾し、大平地区には松ヶ丘に三〇棟の長屋が建てられています。ただ、こうした入植地に移住できたのはほんの一握りで、ほとんどの藩士と家族は、扶持米を頼りに細々と暮らしていました。

斗南藩領有地

もっと斗南藩

①三沢市先人記念館

日本初の民間洋式牧場を開設した斗南藩少参事であった廣澤安任をはじめ、地域の発展に尽力した人々を顕彰する記念館。

【場 所】三沢市谷地頭 4-298-652

【問い合わせ】0176-59-3009

②白虎隊供養碑

観福寺境内にある悲運を遂げた白虎隊士の供養碑で、会津飯盛山の供養塔よりも古い明治4年の建立で、日本最古のもの。

【場 所】三戸郡三戸町大字同心町字熊の林6-2

【問い合わせ】0179-22-2272

③杉原 凱の墓

旧会津藩士で、藩校日新館の学館長を務めた杉原凱の墓。杉原は、明治4年に三戸に移り、この地で病没したが、師と仰ぐ門人達によって三戸大神宮境内に建立された。

【場 所】三戸郡三戸町大字同心町字諏訪内43

【問い合わせ】0179-22-2501



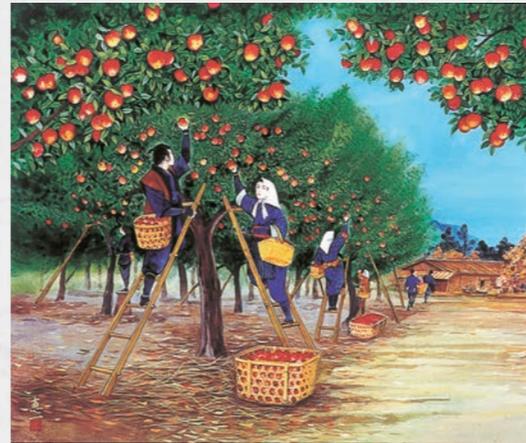
斗南の由来

一説には、中国の詩文の中にある「北斗以南皆帝州」からとったと言われている。北の辺境に流されてきたが、ここも天皇の国に変わりはなく、共に北斗七星を仰ぐ民であるというような意味ですが、望郷の思いと、いつかは南に帰りたいという願いが秘められていたのかも知れません。

もう一つの説は、「南斗六星」を語源とするものです。これは北斗七星に対してつけられた呼称であり、射手座の中央部を指します。この星座をよく見ると、射手が永久に放たれることのない矢を隣のさそりにむけているようです。もちろんさそりは薩長藩閥政府を、射手は会津藩を象徴しており、当時の会津人の心境がぴったりと重なり合います。

産業への取り組み

本格的な農業対策は、明治四年の春、雪解けを待つて行われませんでした。開墾と養蚕をすすめ、藍、茶、煙草、甘藷、蜜柑の類まで栽培させ、鋳物の鋳造、瓦、煉瓦の製造、漆器細工、製紙、機織、畳などの手工業も奨励しています。失敗に終わった作物、産物もありましたが、茶や甘藷は相当の出来栄であったといわれています。先住の百姓でさえ手を焼くやせた土地での苦労は並大抵のものではなかったでしょう。



度重なる苦難

明治四年七月、廃藩置県が行われます。九月には斗南、七戸、八戸、黒石、館の五県が弘前県に合併されてしまい、翌年には政府の援助も打ち切られ、さらにどん底の生活を強いられることになります。そして、生活の破綻と時代の移り変わりに翻弄され、多くの藩士が斗南を去りました。明治六年には扶持米の打切りと転業資金の交付があったため藩士の転出に拍車がかかり、この地に残ったのはおよそ五〇戸に過ぎませんでした。

斗南藩士が残したもの

斗南藩の治世はわずか一年余りに過ぎませんでしたが、会津人の先見の明と、一徹なまでの姿勢は、物心両面においてむつ市をはじめとするこの地方に残した功績は実に大きなものがあります。

容大公と容保公

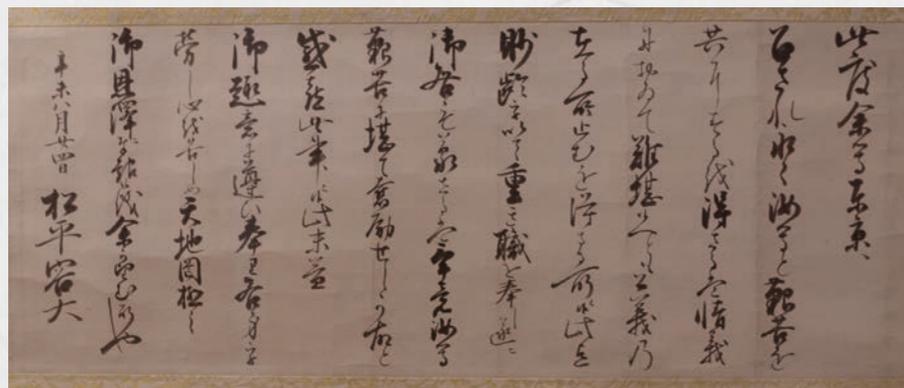
明治2年6月に、会津若松の御薬園で誕生した斗南藩主松平容大公は、幼くして斗南藩知事に任ぜられ、明治3年9月2日、籠におさまり、会津を出立しました。当初藩庁が置かれた五戸に仮寓し、田名部へ藩庁を移したことに伴い、明治4年2月18日に田名部の地に入りました。藩庁の仮館となった円通寺では、政務を行い、徳玄寺を食事や遊興の場としていました。

藩知事とはいえ、年端もゆかない幼君であり、実際の政務は山川権大参事をはじめとする家臣達によるものでありましたが、陽春を迎える頃には家臣達の差配により、移住者達の激励、志気高揚のため、下北半島内の領内巡行に出向いています。

容保公は家名再興後も謹慎の身でしたが、明治4年3月14日には斗南藩へ預替えとなり、養子の喜徳とともに、東京から函館、佐井を経由し同年7月20日、円通寺に到着しました。円通寺では、幼い容大公が父である容保公を出迎え、多くの家臣達が感涙にむせんだといひます。容保公と容大公にとっては、これが親子の初対面であったといわれ、二人は、喜徳とともに約1ヶ月の間、親子水入らずの日々を過ごしましたが、政府からの上京命令により、同年8月25日、斗南を後にしています。

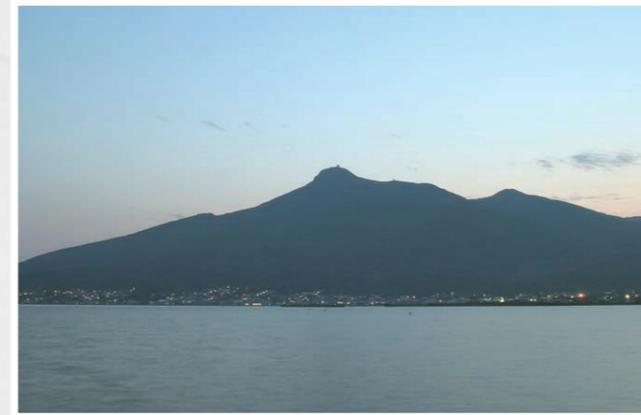
この地を去るにあたり、容保公は、容大公の御名で布告（松平容大公書翰）を出しています。大意としては「このたび東京へ召喚され、皆と苦勞をともにできないのは耐え難いが、公儀の思し召しでありやむを得ない。これまで幼齡でありながら重職を奉じおとがめも受けなかったことは、皆が苦難に堪え、奮励したおかげだと喜んでゐる。この先も益々（天皇の）御趣意に遵って、身を削り、心を配して、（天皇の）限りない恩に報いることが私の望みである」という内容になっていますが、幕末から長年にわたる藩士の艱難辛苦の責を詫げる思いと、天皇を仰ぐ忠実な臣民であるとの訴えが読みとれます。

松平容大公書翰



こうようしょ
向陽處 蔵(大間町)

釜臥山と斗南藩



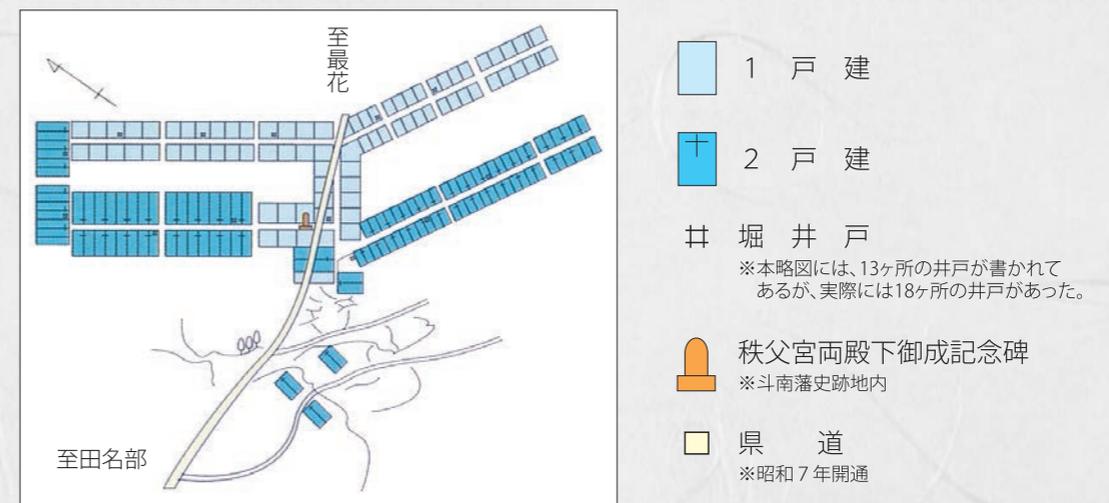
釜臥山

会津人は、誰が言うでもなく、陸奥湾を猪苗代湖に、釜臥山を故郷会津の磐梯山に見立て、斗南磐梯とよんで墳墓の地を偲びました。明治3年に先発の藩士達が始めて田名部に到着した際には、住民達が軒先に提灯を吊し、敬意を表して迎えたといわれ、感慨ひとしおであったことでしょう。

斗南藩のまちづくり

斗南藩が市街地を建設したのは、田名部川の流域に開けた平野をはさみ田名部の町に相對した妙見平と呼ばれる丘陵地帯でした。領内の開拓拠点となることを夢見たこの開墾適地は、藩名をとって「斗南ヶ丘」と名づけられました。市街地は1戸建約30棟・2戸建約80棟からなり、東西に大門を建築して門内の乗打ちを禁止し、18ヶ所の堀井戸をつくりました。また、一番町から六番町までの大通りによって屋敷割りされ、1屋敷を百坪単位として土塀を巡らせて区画しました。

斗南ヶ丘市街建設計画図



斗南藩ゆかりの史跡マップ

① 徳玄寺



容大公の食事や遊びの際に利用されたり、また斗南藩重臣の会議場ともなったお寺です。斗南ヶ丘市街建設計画図面などが保存されています。

④ 柴五郎一家居住跡



柴五郎とその一家が、明治4年から間借り住まいしていた所です。付近には、柴五郎の兄、五三郎が仮住まいしていた呑香稲荷神社があります。

⑥ 斗南藩士上陸の地



明治3年、新潟から海路をたどって藩士達が上陸した地のひとつが大湊大平浦(現、大湊新町)です。石碑は会津鶴ヶ城の石垣に使用されている慶山石を用い、会津若松市を望む方向に設置されています。碑文の揮ごうは会津松平家第13代当主松平保定氏によるものです。

② 招魂碑



明治33年8月、円通寺の境内に会津藩士の招魂碑が建てられました。碑面は、斗南藩主松平容大公の揮ごうで、碑文は会津藩士族南摩綱紀博士の撰によります。

③ 円通寺



斗南藩の仮館として藩庁が置かれ、斗南藩校日新館が開かれた場所。容保、容大両公が起居を共にしており、容大公愛玩の布袋像などが保存されています。

⑧ 感恩碑



昭和11年10月21日の秩父宮兩殿下のご巡遊を記念し、尻屋地区の有志が感恩碑を建立。

⑨ 尻屋埼灯台



尻屋岬周辺の海域は、航海の難所として恐れられていました。尻屋埼灯台は、明治4年に斗南藩の設置運動により、同6年に起工し、同9年に竣工されたもので、我が国最古の洋式灯台の一つです。



⑤ 斗南藩墳墓の地



斗南ヶ丘(現、最花地区)で唯一生き残った嶋影家や斗南会津会の人々が建てた碑が、わずかに残っている会津人の墓碑をあたたかく見守っています。

⑦ 斗南藩史跡地



斗南藩が計画、整備した斗南ヶ丘市街地の一角です。昭和11年10月の秩父宮兩殿下の下北御巡遊の際、この地を訪れたことを記念し、昭和18年7月、会津相携会(現、斗南会津会)がゆかりの地斗南ヶ丘に記念碑を建立。付近には、斗南藩士移住当時の井戸や土堀跡などがあります。